

幻想と現実との相剋

—Charlotte Brontë の Juvenilia (3)—

和 知 誠 之 助

18才では人生の真の物語はまだこれから始まるころだ。18才になる前は、私たちは坐ったまま、信じられないような作り話——楽しいのもあり悲しいのもあるが、ほとんどいつも非現実的な話——に耳を傾ける。18才になる前は、私たちの世界は崇高・華麗である。そこに住む人々は半神か半悪魔であり、情景は夢のなかのもので、自然に見られるものよりずっと暗い森、不思議な丘、明るい空、危険な海、うるわしい花、食欲をそそる果実、広い平原、荒涼たる砂漠、日のかがやく原が、私たちの魔法にかけられた世界にひろがる。・・・

その時期——すなわち幻想の空なる夢の境界に近づく18才には、妖精の国は背後にあり、現実の岸辺が前面に浮かびあがる。その岸辺はまだ遠く、とても青くやわらかくやさしく見え、そこに到達したいと切望される。・・・そこに達しさえすれば、もう飢え渴することもなかりうと思われる。しかし真の幸福が味わえる前には、多くの荒野と死の洪水、あるいは死と同じく冷たく、ほとんど同じくらい黒い悲しみの流れを越えなければならない。・・・

18才ではわたしたちはこれに気づいていない。・・・要するに18才では、経験の学校に入るところだ。そして自尊心を傷つけ砕き打ちひしくが、しかも心を清め気を引き立たせてくれる教をまだこれから学ぶところだ。¹⁾

これは *Shirley* の女主人公 **Caroline Helstone** について書かれたもので、**Charlotte** が成熟した後に描いた18才の少女像である。長々と引用したが、これによって18才の **Charlotte** を想い描いてもあまり遠くはなかりう。当時の彼女はまだ人生の真実に気づかず、「夢の境界に近ず」いていて、夢と現実との境目で模索していた、といえよう。この時期の彼女の作品には、幻想

1) *Shirley*, Chap. VII, pp. 75—76. (Everyman's Library).

の世界に遊び模倣に熱中しながらも、例えば弟の **Branwell** など周囲の現実を見わたして、幻想と現実との相剋に苦しみ模索をつづける傷ましさをうかがうことができる。

幼ない日々の夢を **Charlotte** と共にした弟の **Branwell** は、その後も夢の世界から脱し切れず、幻想と現実との限界を見きわめることができず、やがて現実の世界に敗退する。**Emily** は **Branwell** の愚かさにも染まらず、また **Charlotte** の二元性をも越えて、ひとり強じんな想像力の世界に住みつけ、確乎とした独自の世界を構築してゆく。

Charlotte は両者の中間にあると云えよう。17才18才以後もさらに何年かの間 **Angria**, ‘that burning clime’¹⁾ に夢を狂おしくかけめぐらした彼女は、1839年 “The Last of Angria” において **Angria** への訣別の辞を敢然と表明する。そして後に *The Professor* の序文において、“plain and homely” なものへの志向を表明するが、*Jane Eyre* においては、抑制されていた想像力が見事に開花することは周知の通りである。更にまた *Shirley* においては再び激情よりも経験に則して行こうとして光の消えた世界に帰るが、やがて *Villette* において幻想と現実との微妙な融合がなされ、**Charlotte** の芸術が完成に近づいてゆく。

想像の世界のみに生きられる **Emily** は天才であり、幻想と現実との区別のできぬ **Branwell** はみじめである。しかし現実のみに執着することもできず、幻想のみに遊ぶこともできず、幻想を脱して想像の世界を夢みるが、現実の無視も許されない **Charlotte** はあわれである。現実を、いや人間存在の根源をつきつめて行けば、**Charlotte** が心ひかれた **Milton** や **Scott**, 更に **Byron** のように、そこで「悪」に突きあたらざるを得ない時、混乱と動揺を招いたとしても、誰がそれを笑うことができようか。時に酒に酔いしれるのを現実逃避とののしられようと、幻想に思いをはせて時に我を忘れはて

1) “The Last of Angria” の中にある一句 (*Miscellaneous and Unpublished Writings of Charlotte and P. B. Brontë* [以後 *Writings*], The Shakespeare Head Brontë (以後 SHB), Vol. II, p. 404.

るのを痴人のたわごととしられようと、人はみなそれぞれの生き方に懸命である。芸術は所詮ある種の阿片でもあろうか。最も現実性の密度の濃いイギリスの小説にあっても、それが現実凝視のはてに生れるものであればこそ、それは同時に夢の陶醉への一つの傾斜の表現であることを否定できない。Charlotte の成人した後の作品の中にも痛ましいまでに交錯する幻想と現実とが織りあやなす糸のあやしさは私たちの胸をしめつけてやまない。

Charlotte の成人後の作品の基底となる想像力は、深い現実認識の上に立った強じんな想像力であって、幼ない日々の漠とした夢とは全く異質なものであることは言うまでもない。しかしそれは彼女にあっては、これら幼ない日々にて育てた夢の世界を通してこそ生れ出たことを無視できないであろう。

1. 模倣と模索

1831年1月から1832年7月までの Roe Head における生徒生活を終えて、約一年半ぶりに故郷の Haworth に帰った Charlotte (16才) は、その留守中男性としての成長を実生活にも¹⁾ 作品の上にも反映しかけていたがまだ幼ない空想の物語を書きつけていた Branwell と、二人の妹たち²⁾ とに囲まれて、自由な楽しい日々を送り、籠の鳥が大空に放たれたように、再び魂の翼を存分にはばたかせて行った。これから1835年7月(19才)に今度は教師として Roe Head に出かけるまでの約3年間は彼女が ‘a life of golden romance’³⁾ を楽しんだ幸福な時期であった。

既に引用した Ellen Nussey への手紙⁴⁾ にも見られるように、外面的に

- 1) Branwell は村の ‘The Black Bull’ という屋酒屋で村の若者と交わったり、拳闘を好きになりスポーツ紙を読みふけるようになっていた。
- 2) Emily と Anne との二人は北大平洋に Gondal という大きな島を設定し、別個の世界を創造していた。
- 3) Fannie E. Ratchford (ed.), *Legends of Angria*, ‘Introduction,’ xxiv.
- 4) 「Charlotte Brontë の Juvenilia その1」, 『甲南女子大学英文学研究』第6号, p. 6.

は主婦がわりの長女としての家事や弟妹の教育などにつとめながらも、Charlotte は Roe Head の生徒生活による制約とおくれを一気に取り戻そうとするかのように、Branwell とともに、烈しく燃え立つ想像力をロマンスの世界に投げ込んで行ったのである。

この時期における Charlotte の作品に最も顕著な特色は、ロマン派作家、特に Scott と Byron の模倣である。それはロマンへの傾斜であると同時に、「悪」の探究でもある。人間性の複雑さ、云ってみれば、人間の不完全さの認識であり、激しい愛情のあとに訪れる心変わり、それに伴う嫉妬、復讐、友情と裏切り、策略とそれへの憤りなど、人間のもつまざまな様相、愚かさ、醜さともいえるかも知れないが、それぞれ「我」をもつ近代の人間にまぬがれぬあわれさが、少女期を越えようとする Charlotte の心を大きく動揺させてくる。

このような人間性の複雑さに対する認識は主として文学を通して得られたものであり、1834年7月4日付の Ellen Nussey あての手紙の次の一節は、Charlotte の当時の読書傾向を端的に語っている。

... If you like poetry, let it be first rate, Milton, Shakespeare, Thomson, Goldsmith, Pope (if you will, though I don't admire him), Scott, Byron, Campbell, Wordsworth and Southey. Now don't be startled at the names of Shakespeare and Byron. Both these were great men and their works are like themselves. You will know how to choose the good and avoid the evil; the finest passages are always the purest, the bad are invariably revolting; you will never wish to read them over twice. Omit the Comedies of Shakespeare and the *Don Juan*, perhaps the *Cain*, of Byron, though the latter is a magnificent poem and read the rest fearlessly. That must indeed be a depraved mind which can gather evil from *Henry VIII*, from *Richard III*, from *Macbeth*, and *Hamlet* and *Julius Caesar*. Scott's sweet, wild, romantic poetry can do you no harm, nor can Wordsworth, nor Campbell's, nor Southey's, the greater part at least of his; some is certainly exceptionable. For history, read Hume, Rollin, and the

Universal History, if you can—I never did. For fiction—read Scott alone; all novels after his are worthless. For biography, read Johnson's *Lives of the Poets*, Boswell's *Life of Johnson*, Southey's *Life of Nelson*, Lockhart's *Life of Burns*, Moore's *Life of Sheridan*, Moore's *Life of Byron*, Wolfe's *Remains*....¹⁾

ロマン派作家の影響については既に触れたが、²⁾ この一節にもその傾向は明白にうかがわれる。特に Scott と Byron への心酔は著しく、「小説については——スコットだけを読みなさい。彼以後の小説はすべて無価値です」という言葉は、Charlotte の Scott への傾倒を最も明白に示している。また Byron については、1824年にギリシャのミノロンギで悲劇的な死をとげて以来12年あまり経っていたが、彼の熱情の色調は幼い Charlotte の胸に痛ましいまでにいきいきと生き続けていた。³⁾ いわゆる Romanticism なるものには、今更ことわるまでもなく、さまざまな色調が見られる。自由への熱烈な渴望、因襲への叛逆、はかり知れざる自然への驚嘆、伝奇性への偏向、抒情、憂愁、哀傷、超自然・神秘への傾斜、自我の爆発とその拡大への熱望など、一見矛盾するかに見えながらも互いにつらなり合うもろもろの心情、Scott にも Byron にも見られるこれらの色調が、この時期の Charlotte の作品に、未消化ではあるが、それだけにかえてあざやかに浮かび出ている。Scott と Byron との類似性については既に指摘されているが、⁴⁾ Byron は

1) Mrs. Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë* (The World's Classics), pp. 103—104.

2) 『甲南女子大学英文学研究』第6号, pp. 24—25.

3) 例えば *Caroline Vernon* (1839) においても, “Do you read Lord Byron, then?” と Northangerland に問われた Caroline に, “Yes, indeed I do, and Lord Byron and Bonaparte and the Duke of Wellington and Lord Edward Fitzgerald are the four best men that ever lived.” (*Legends of Angria*, p. 246) と答えさせている。

4) Cf. 阿部知二『バイロン』(創元選書, 1948), pp. 109—111.

1812年 Scott と文通を始め、¹⁾ 1815年までは顔は合わさなかったが、Scott に対しては当代のどの作家に対してよりも大きな敬愛の情を捧げていたことが知られている。Scott の方も、1821年に Byron の *Cain* が世の多くの非難を受けたのに対し、かねて彼に好意をもっていた Scott は、それを Milton の *Paradise Lost* にたとえて弁護したりしている。²⁾ また1828年 Scott が Lady Francis Gower に招待されて「海賊」の歌が歌われるのを聞いた時、それは彼自身の *The Pirate* の中からのものだったが、彼はそれを Byron の作と思ったりするようなこともあった。これは阿部氏も指摘しておられるように、両者に人間的にも文学的にも類似性が強かったことを物語っている。

ロマンへの志向の強かった Charlotte が、このように著しい類似性をもつ Scott と Byron との両者に対して、いずれにも烈しく心酔したことは自然の成り行きであって、それはこの時期の彼女の作に殊に著しく跡を残している。例えば作品の表題だけを見ても次のような影響が見られる。

Scott *The Bridal of Triermain* (1813)

The Black Dwarf (1816)

The Bride of Lammermoor (1819)

The Pirate (1821)

Byron *The Bride of Abydos* (1813)

The Corsair [「海賊」] (1814)

Charlotte *The Bridal* (1832)

1) 1812年7月6日付の Byron の Scott への手紙について次のような注が加えられている。——“The correspondence which begins with this letter laid the foundation of a firm friendship between the two Poets.” [*Letters and Journals*, Vol. II] (*The Works of Lord Byron*, ed. Rowland E. Prothero, 1966), p. 131, fn.

2) Scott は Murray への手紙 (1821年12月4日付) で、Byron から *Cain* を献呈されたことに感謝し、*Cain* について次のような賛辞を述べている——“I do not know that his Muse has ever taken so lofty a flight amid her former soarings. He has certainly matched Milton on his own ground....”

The Green Dwarf (1833)Branwell *The Pirate* (1833)

The Bridal.¹⁾ 1832年7月に Roe Head から帰った Charlotte は8月20日には既に *The Bridal* を書き終えている。これは詩と散文で書かれているが、どちらも Marquis of Douro と ‘the beautiful, virtuous, and accomplished, but untitled, Marian Hume’ との結婚の物語である。Douro 侯は若くして多くの情事を重ね、Byron と同じく女性の方から熱烈な愛を捧げられる。この物語より後に加えられていることだが、関連上ここで説明しておく、彼の最初の妻（又は恋人）は Lady Helen Victoria で Ernest Edward Gordon Wellesley を生んでいる。²⁾ 次に忠実な恋人 Mina Laury と情愛を交わし、³⁾ Marian Hume は第三番目の女性であり、これらはすべて Douro 侯が21才以前のものとされている。第四番目の女性は Mary Percy である。Douro 侯は Mary Percy を見るとすぐ心ひかれ、Marian Hume を捨てて Mary Percy と結婚する。⁴⁾

このように Douro 侯の性格も情事も後の物語では複雑化して行くが、この *The Bridal* はまだ子供っぽい空想の所産であり、魔法使いの登場によって困難を解決させたりする幼なさを抜け出していない。しかし成人後の作品の原型と思われるものがいくつか見出される。Douro 侯と Marian との婚約をしっかりとした Lady Zenobia Ellrington が狂わんばかりにそれを妨害しようとする姿は *Jane Eyre* の狂気の妻を思わせる。

1) *The Twelve Adventures and Other Stories* (1925) では “Love and Jealousy”. 原稿は18頁、3 $\frac{1}{2}$ インチ×2 $\frac{1}{2}$ (4,000語+18行)。そのうち4頁は現在 Haworth の The Bonnell Collection に、残り14頁は Philadelphia の H. H. Bonnell の所有。散文の物語に挿入された ‘He is gone, and all grandeur has fled from the mountain’ に始まる詩は、その1年前の1831年7月休暇中に Haworth に帰った時の作のように思われる。(cf. *Writings*, SHB, Vol. I, p. 207 fn.)

2) Cf. *History of Angria*, III (1836)

3) Cf. *Politics in Verdopolis* (1833), *The Spell* (1834), *Mina Laury* (1838).

4) 本稿 p. 31 (*Politics in Verdopolis* についての個所) 参照。

次の一節は Lady Ellrington のそうした狂気の姿の描写の一部である——

One evening about dusk, as the Marquis of Douro was returning from a shooting excursion into the country, he heard suddenly a rustling noise in a deep ditch on the roadside. He was preparing his fowling-piece for a shot when the form of Lady Ellrington started up before him. Her head was bare, her tall person was enveloped in the tattered remnants of a dark velvet mantle. Her dishevelled hair hung in wild elf-locks over her face, neck, and shoulders, almost concealing her features, which were emaciated and pale as death. He stepped back a few paces, startled at the sudden and ghastly apparition. She threw herself on her knees before him, exclaiming in wild, maniacal accents:

'My lord, tell me truly, sincerely, ingenuously, where you have been... Have you seen that wretch Marian Hume? Have you spoken to her? Viper! Viper! Oh, that I could sheathe this weapon in her heart!'

Here she stopped for want of breath, and, drawing a long, sharp, glittering knife from under her cloak, brandished it wildly in the air.¹⁾

また Douro 侯は Lady Ellrington について地下の洞くつに行くとき、そこで魔法使いから、Marian との結婚は二人を破滅に導くので天の予言の星によって定められた Zenobia の手をはばむな、と告げられた時、'duty' と 'true love' との間の争いになやむ。

The combat betwixt true love and duty raged for a few seconds in the marquis's heart, and sent his life-blood in a tumult of agony and despair burning to his cheek and brow...²⁾

1) *Writings*, Vol. I, SHB, p. 209.

2) *Ibid.*, p. 213.

ついに義務感が勝ち、天の命令に従おうとする時、‘There is magic. Beware.’の聲が聞こえ、許しを乞う Lady Ellrington を捨てて去る。これは *Jane Eyre* において、Jane が St. John の訴えに負け、‘I had now put love out of the question, and thought only of duty’ (Chap. 35) と考えて義務感に従おうとした時、どこからともなく、“Jane! Jane! Jane!”と呼ぶ声を耳にして、St. John を振り切る Jane を想起させる。また結婚の準備にいそがしい時、Rogue の首謀による賃上げ暴動が起り工場主が殺されたりする騒ぎは、Roe Head の Miss Wooler から聞いた当時の Luddite Riots の話に基づいていて、後に *Shirley* で詳細に取り上げられることになる。

次の1833年(17才)は Charlotte の一生のうちでおそらく最も多産の年であり、¹⁾ 多量の散文と詩が残されている。そのうち *The Foundling* (May 31-June 27), *The Green Dwarf* (Sept. 2), および *Arthuriana* (Sept. 27—Nov. 20)²⁾ の三つが注目される。第一のものには Byron の “Manfred” (1816—17), 第二には Scott の *Ivanhoe* の影響が明白にあらわれている。

The Foundling.³⁾ この物語の主人公 Edward Sydney は Dirbyshire の小屋で赤ん坊の時拾われた捨子だが、成長して養父の死んだ後、自分の実名を知り、その頃アフリカに発見された植民地 Verdopolis に新しい運命を求めて出かける。到着してすぐ Douro 侯の愛顧を受け、侯が憎む Rogue に対抗するために議会の一員となり雄弁を振るって活躍する。そして Douro 侯のいとこ Lady Julia Wellesley を恋し、その心を得るのに成功し結婚を望む。しかし彼女には父のきめた婚約者があり、身分低き者には望みなしと知った Sydney は、貴族と確信している自分の親の発見につ

1) タイプしたら最も少なく見積っても1,000頁は書いている。(Cf. Fannie E. Ratchford, *The Brontës' Web of Childhood*, p. 67.)

2) 散文と韻文の断片的なものを集めたもので、18,600語と278行。原稿は J. Pierpont Morgan Library 所蔵。

3) 原稿は20頁、 $7\frac{5}{16}$ インチ× $\frac{16}{9}$ (34,000語)。現在 Ashley Library の所蔵。副題は “A Tale of Our Own Times by Captain Tree.”

とめる。Wellington 公の助けを得た彼は、Verdopolis の貴族の若者が教育される大学（魔法使いの Manfred が学長）のある Philosopher's Island に行き、そこで Frederick Guelph, Duke of York and King of the Twelves が父であることを知る。そして Julia が嫌な貴族との結婚を強行されようとしている場に丁度帰り着き身分を明らかにする。その後まもなく Prince Edward of York である Sydney は Julia とめでたく結婚する。

以上がこの物語の概略であり、Charlotte はその序文にわざわざ、この物語には 'vile and loathesome falsehoods' は含まれておらず、自分の町で昨年起ったことだ、などと事実らしさをよそおおうとしているが、捨子の身分が高いことが判明してめでたしめでたしとなるという、Tom Jones など18世紀の多くの小説に見られるきまり切った型の踏襲に過ぎず新しさは全く見られない。作中人物にも Bravey, Sergeant Bud, John Gifford, Captain Flower, Crashie など、幼時のおとぎ話的物語に登場させた人物を多く用いていて、まだ真の想像力を働かせるに至っていない。また Manfred なる人物にも、Byron の描いた Manfred の、自我にとりつかれた孤独、傲岸と悲愴な情熱のかけらも見られないし、Horace Walpole の *The Castle of Otranto* の Manfred の悪魔的性格ももちあわせていない。むしろこの物語の Manfred は Douro 侯の死を歎き悲しみの歌を歌う、子供の空想に都合のよい魔法使いにすぎない。（Douro 侯はあとで魔法により生き返される。）

このように Gothic Romance の影響をうつつしているおとぎ話や魔法の取扱いなどには未熟さをはっきり残しているが、Charlotte の描写の筆はかなり進んでいて、Ratchford 女史も Glass Town の描写はすぐれたものの一つだとしてその一節を長く引いている。¹⁾ また静穏さよりも嵐にはげしく歓喜する色調は Charlotte のこの後の作品に次第に強まって行くが、Byron の影響と思われるその傾向は、この物語中に挿入された詩の次の一節にも読みとることができる。

1) Cf. *Op. cit.*, p. 68.

List to the voice of the far tempest yelling;
 Darkly it broods o'er that white icy hill;
 Yet its dread music is deep'ning and swelling;
 Sounds the loud wind-blast more hollow and shrill.

Stern is the welcome, and haughty and high,
 Which greets my return to the land of my birth;
 Thunder peals speak from the heart of the sky;
 Pine forests bow to the storm-smitten earth.

Yet to my spirit more sweet is the sound
 Than the music which floats over vine-covered France,
 . . .

Byron の *Manfred* に見られる Astarte の幽霊に向っての悲痛な叫びは *Wuthering Heights* の Heathcliff を思わせるが、Emily などと共に Byron を読んだと思われる Charlotte は、ここではより幼ない形であるが Byron に影響されたことが明白である。上の一節なども、*Manfred* のなかの 'My joy was in the wilderness' (Act II, Scene II) に始まる Manfred の独白の幼ない模倣のあとを残している。

The Green Dwarf.¹⁾ この物語には "A Tale of the Perfect Tense" という副題がつけられているが、それは弟の Branwell が悪漢 Rogue に重要な役割を与えて展開させているので、Charlotte が Angria 物語全体の連関性を維持するために過去にさかのぼって Rogue の経歴を語ろうとしたためである。また Scott の歴史小説のあり方に暗示を受けたためとも考えられるが、この方法は他の詩や物語においても、たびたび見られる姉弟の常套手段であった。

Branwell は *The Pirate* (Feb. 8, 1833) において、その前に書いた *Letters from an Englishman* (Sept. 2, 1830—Aug. 2, 1832) において死なせた Alexander Rogue を再び取り上げ、残酷だが強力な海賊として外洋ではな

1) 原稿は25頁、 $4\frac{11}{16}$ インチ× $3\frac{3}{4}$ (34,000語)。Texas 大学図書館所蔵。

ばなしい活躍をさせたのち、Verdopolis に掠奪物を持ち帰り、Lady Zenobia Ellrington¹⁾ と結婚させた。

これに対し Charlotte は *The Green Dwarf* において、20年前の Rogue を、Branwellのように単なる冒険好きな悪漢とせず、ロマンチックな色彩を加えて登場させる。若い頃の Rogue は Colonel Alexander Percy と呼ばれる美青年だったが、Lady Emily Charlesworth に心奪われ、恋仇の Lord St. Clair に変装して彼女を人里離れた城に閉じこめる。更に St. Clair をも謀反の罪をきせて取り除こうとする。しかし最終裁判の時 Percy の謀略が明らかになり、彼は Wellington 公から死刑を宣告され、のちに16年の追放に処せられる。その間彼は世界を放浪し盗賊・海賊などの間ですごす。流刑の期間が終ると Verdopolis に帰り、既に死んでいる伯父の遺産を得ようとするが無駄と分り、次に名をかえて政治に関心を向ける。「あの煽動的政治家、やつれ果て衰えた放蕩者 Alexander Rogue, Viscount Ellrington にかつての異彩を放つ美男の青年将校 Colonel Augustus Percy の面影はほとんど見るべくもない」と結んで、Charlotte は Branwell の描く Rogue 像と関連づけている。

17才になった Charlotte は Roe Head の学校生活によって大いに知識と経験を広め、それ以前に書き綴った“The Young Men’s Play”にあきたらなくなったが、まだ自ら語るべきものももたず、いわば一つの曲り角で混乱しているようである。幼年時代からの崇拜の的であった Wellington 公も主要人物として登場するのはこれが最後であり、以後はその息子の Zamorna (もとの Douro 侯) が Byronic hero 的性格をむき出しにして Charlotte の繰りひろげる舞台の中央で活躍することになる。²⁾

1) Branwell は ‘I’ をダブらず ‘Elrington’.

2) May Sinclair は *The Three Brontës* において、‘You can track the great Gondal hero down by that one fantastic name, Zamorna.’ と述べて ‘that Byronic hero’ Zamorna と Heathcliff との類似性を追求していて興味深い。彼女は Charlotte の Angria 物語と Emily の Gondal の世界とを混同している。Cf. *op. cit.*, pp. 195—210.

その転期としての表われは、この作のプロットが Scott の *Ivanhoe* の模倣になっていることにも見られる。*Ivanhoe* が歴史小説であるのに対し *The Green Dwarf* が「過去形の物語」であることは既に述べたが、その他次のような点にも著しい類似が見られる。

Ivanhoe

1. Ashby-de-la-Zoucheでの競技。
2. 無名の騎士が勝利の賞を受ける時かぶとの面頬をとるのを断わる。それは物語の主人公 *Ivanhoe*。
3. 競技における *Queen of Love and Beauty* の *Lady Rowena* は、*Ivanhoe* に変装した *De Bracy* に誘拐され、*Front-de-Boeuf* の城にとじこめられる。
4. 古城で *Rowena* 姫を看視する意地悪の老婆 *Ulrica*。
5. *Rebecca* の裁きでの多くの偽証。
6. 三日間の猶予がおかれた後の裁判で *Rebecca* の無実が判明。

The Green Dwarf

1. the African Olympic Games。
2. 無名の勝利者はかぶとを脱ぐのを断わる。それは変装した *St. Clair*。
3. 競技における the rewarder of the Victors の *Lady Emily* は、*St. Clair* に変装した *Percy* に誘拐され古城にとじこめられる。
4. 古城で *Emily* 姫を看視する気味わるい老婆 *Bertha*¹⁾。
5. *St. Clair* の裁きでの多くの偽証。
6. 6週間の猶予の後の裁判で *St. Clair* の無実が判明。

作品としてはまことに未熟で勿論 *Ivanhoe* と比較すること自体滑稽だけれども、この時期が *Charlotte* の一つの転期であり、彼女が独自な方向に進む一段階として Scott の模倣に熱中したことを明らかにしたかっただけである。この作ではまた、いわゆる *Byronic hero* といわれる人間像が大きな存在となっていることも注目すべきである。例えば *Percy* は次のように描かれている——

1) *Jane Eyre* の狂妻 *Bertha Mason* の前おれ。

The countenance of this gentleman was, as I have said, handsome. His features were regularly formed. His forehead was lofty, though not very open. But there was in the expression of his blue, sparkling, but sinister, eyes, and of the smile that ever played round his deceitful looking mouth, a spirit of deep, restless villainy which warned the penetrating observer that all was not as fair within as without, while his pallid cheek and somewhat haggard air bespoke at once the profligate, the gambler, and perhaps the drunkard.¹⁾

ここには美と悪のいりまじったこのような人間像を中心にして、激烈な愛情・憎悪・嫉妬・復讐など、こののち Charlotte が最も集中するモチーフが顕著である。

*Tragedy and the Essay.*²⁾

これは同じ1833年10月6日に書かれたもので、この中で劇場での女優の演技に観衆が大喝采する情景が描かれていて、*Villette* の Rachel の演技の情景を予示している。劇や劇場についての描写は Charlotte が恐らく Ponden House の図書館を利用して劇や劇場についての知識をたくわえていたことを暗示させるが、これも曲り角に立つ Charlotte の姿勢をうかがわせる。

2. Angria 王国の創設

1834年にも Charlotte (18才)は多くの物語や詩を書いている。³⁾ これまでにも Charlotte 11才 Branwell 10才の1826年に始められた “The Young Men’s Play” における人物創造はいくたの変貌をとげて来ていたが、この年に Branwell と一緒に創設した Angria 王国を舞台にして彼女は、最初は

1) *Legends of Angria* (ed. Fannie E. Ratchford), pp. 22–23.

2) *Arthuriana* の一部。3,500語。*The Twelve Adventures and Other Stories* (1925) に収録されている。

3) Winifred Gérin によれば、この年だけで残存する原稿は141,000語の散文と400行の韻文から成る。Cf. *Charlotte Brontë*, p. 87.

やはり模索の過程をまねがれなかったが、次々と人間模様を織りすずめる。彼女自身の語を用いると、‘one set of features, which they (i. e. readers) have seen now in profile, now in full face, now in outline, and again in finished painting——varied but by the change of feeling or temper or age; lit with love, flushed with passion, shaded with grief, kindled with ecstasy; in meditation and mirth, in sorrow and scorn and rapture; with the round outline of childhood, the beauty and fulness of youth, the strength of manhood, and the furrows of thoughtful decline’¹⁾を描きつけ、華麗な世界を創造して行くことになる。

Angria は通常の道徳を越えた激情の世界であり、そこに生きる人々はいわゆる *Byronic hero* であり、誇り高く愁いを宿し、皮肉で反抗的、他を軽蔑するが自らの心のうずきにのたうち、復讐に仮借しないが深く強い愛情に燃える人である。それは Byron の「海賊」と同じく、‘a man of loneliness and mystery’²⁾で、‘Lone, wild, and strange’³⁾である。またその魂は ‘stern and high’⁴⁾であるが ‘Fire in his glance, and wildness in his breast’⁵⁾であり、また ‘He knew himself a villain——but he deem’d/ The rest no better than the thing he seem’d.’⁶⁾のように、高い誇りをもっていた。それは the Child of Nature であり the Gloomy Egoist であり the Man of Feeling であると同時に Villain でもある。また the Hero of Sensibility であると共に the Noble Outlaw でもある。人間の歴史の中に永遠に見られ、特に近代になって自我の誇りとうめきが高まるとともに一層大きく浮かび上って来たこの人間像が Romanticism の炎にあおられて Charlotte の若い想像力を強く刺激したのである。そしてこのような人々の

1) “The Last of Angria,” *Writings*, Vol. II, SHB, pp. 403—404.

2) Byron, “The Corsair,” Canto I, 8, l. 173.

3) *Ibid.*, Canto I, 10, l. 271.

4) *Ibid.*, Canto III, 6, l. 216.

5) *Ibid.*, Canto I, 16, l. 531.

6) *Ibid.*, Canto I, 11, ll. 265—266.

住む王国、彼女自身のいわゆる ‘the infernal world’¹⁾ に向けめぐらせた夢は何らかの点で一生彼女の心に生き残ることになる。しかし *Angria* 物語が華やかな展開を見せるのは、この年の後半からであって、前半においては彼女はまだどのように夢を展開すべきかに当惑しているようで、次の二つの作はそのあらわれである。

*A Leaf from an Unopened Volume.*²⁾ この年の最初 (Jan. 17, 1834) に書かれたこの作品では *Angria* 王国そのものより、その将来の一面が描かれている。皇帝 *Adrian* (もとの *Douro* 侯) とその宿敵 *Northangerland* 侯(もとの *Percy*)との物語というより、彼等の息子達の恋愛事件についての物語であり、息子達はそれぞれの父と同じく互いに敵視するものとなっている。

High Life in Verdopolis (Feb. 20—March 20, 1834.)³⁾ *Child Harold* の一節の引用から始まるこれは *Byronism* の楽しいばか騒ぎを描いたもので、*Warner Howard Warner* と *Ellen Grenville* との結婚の物語となっている。また *Zamorna* と結婚したばかりの *Mary Percy*⁴⁾ が、新婚三カ月の夫 *Zamorna* と他の女とのたわむれを見て苦しむさまが描かれているが、これは *Zamorna* と関係をもつすべての女性の宿命で、女性の愛の不幸というこのテーマはこれ以後も *Marian Hume* から *Mina Laury* に至るまで種々の形で取扱われる。他方 *Zamorna* は新妻の以前の婚約者との関係にあらぬ嫉妬心をもやして無実の妻を苦しめたりするが、*Byronism* のこのような影響は *Charlotte* の作品に次第に濃厚な影を落して行くことになる。

1) 1836年8月11日の日付のある断片の手記に次の一節がある。——‘All this day I have been in a dream, half miserable, half ecstatic,—miserable because I could not follow it out uninterruptedly, ecstatic because it showed almost in the vivid reality the ongoings of the infernal world.’ (*Writings*, Vol. II, SHB, p. 255). (アンダーラインは筆者)

2) 20,000語。Library of A. Edward Newton 所蔵。

3) 38,000語。British Museum 所蔵。

4) *Zamorna* と *Mary Percy* との結婚については本稿 p. 31 を参照のこと。

Corner Dishes (May 28—June 16, 1834)。これは散文と詩を集めたもの¹⁾であるが、その最初の“A Peep into a Picture Book”は Charlotte が創造した人物の性格の展開をうかがわせる重要な作品である。‘The land of the Genii’は‘The Kingdom of Angria’になり、Wellington は主人公としての役を失ない、悪魔的性格を帯びた Zamorna および Percy に関心が集中されている。Duke of Zamorna は Marquis of Douro の展開したもので、以後は主としてこの名で呼ばれる。²⁾ 彼は名称が変わったのみでなく、初期の物語とは全く異なる性格を展開して興味深い人物になっている。

Wellington 公が Angria 物語において主人公の座をおろされたといっても、それは Charlotte が彼を忘れ去ったためではない。既に述べたように Wellington 公への彼女の崇敬の念は幼時に形成されたもので一生を通じて激烈につづいた。成人後の最初のまとまった作品である *The Professor* においても Yorke Hunsden が Wellington を非難するのに対して Francis Henri は抗議しているし、³⁾ *Shirley* には Wellington について数回の言及が見られる。例えば Robert Gerard Moore が ‘this wooden faced and pebble-hearted idol of England’⁴⁾ にナポレオンを打破の力があると信ずるかと問うのに対し Helstone は、“Wellington is the soul of England.”⁵⁾ と答える。また Shirley が貴族との結婚を断わるのに立腹した伯父が、彼女に理想の男を尋ねると、Shirley は “Arthur Wellesley, Lord Wellington.”⁶⁾ と答える。またこの作の終り近くで作者は自らの声で ‘his grand, old heart’⁷⁾ を弁護している。このように、Charlotte にとって Wellington 公

- 1) 次の三つの詩文から成る。1. A Peep into a Picture Book. 2. A Day Abroad, in four chapters. 3. Stanzas on the fate of Henry Percy. 原稿は Henry E. Huntington 図書館に所蔵。
- 2) Zamorna という名はスペインの一地域の名で、また Douro 河の小さな町の名でもある ‘Zamora’ に ‘n’ をつけて作られたものらしい。Cf. *Poems*, SHB, p. 175.
- 3) *The Professor*, Chap. 24, pp. 213—214. (Everyman’s Library).
- 4), 5) *Shirley*, Chap. 3, p. 28. (Everyman’s Library).
- 6) *Ibid.*, Chap. 31, p. 436.
- 7) *Ibid.*, Chap. 37, p. 503.

は少女の思い描く理想の男性像であり、少女の幻想が一生なつかしいおもかげとして離れなかったのであろう。しかし彼は実在の人物であり、いわば少女の理想像であるが故に、幼時とはもかくとして、人間性の複雑さ、いわば「悪」の認識を深めた Charlotte は、完成された理想的英雄としての Wellington を作中人物として登場させることができなくなったのである。彼女の描いた Wellington 公にしても、*The Foundling* では初期のものにくらべてかなりの変容が見られるけれども、あくまでも実在の人物としての彼の存在ははてしなく拡大する想像力には固定した場所しか与えられず、新しい Angria の王国には理想的英雄よりは、むしろ不完全性をまぬがれない新しい人物が要求されるのは自然のなりゆきであった。

Zamorna は最初から Charlotte の想像力が生み出した人物であり、Byron の強い影響を受けたとはいえ、彼女の現実認識の深まりとともに想像力の自由な働らきを許して、次第に変容と展開を重ねて行くことになる。“Characters of Celebrated Men”(1829)において彼の性格は、‘mild and humane but very courageous, grateful for any favour that is done, and ready to forgive injuries, kind to others and disinterested in himself’ とされ、それと同時に荒れ狂う海のとどろきや雷雨をものもしない豪勇の中に、憂愁のかけをひそめる Byron 的性格¹⁾ が指摘された。しかしこの“A Peep into a Picture Book”では、*Jane Eyre* の Rochester や *Wuthering Heights* の Heathcliff など、Brontë 姉妹のすべての作品の基調となる嵐的性格に強調がおかれている。

...he stands as if a thunderbolt could neither blast the light of his eyes nor dash the effrontery of his brow. Keen, glorious being!

...O Zamorna! what eyes those are glancing under the deep shadow of that raven crest! They bode no good. . . All here is passion and fire unquenchable. Impetuous sin, stormy pride, diving and soaring enthusiasm, war and poetry, are kindling their fires in

1) 『甲南女子大学英文学研究』第6号, p. 26を参照されたい。

all his veins, and his wild blood boils from his heart and back again
like a torrent of new-sprung lava...¹⁾

彼の現在の妻は Percy とその二番目の妻 Mary との間の娘である Mary Henrietta である。最初の妻 Florence Marian Hume²⁾ は雪のように純潔でやさしく、当時の Charlotte (16才) が想い描いていた初期の Douro 侯にふさわしい女性であった。しかし Branwell は、すでに利己的で悪漢的要素をもつ性格に展開されている Douro 侯には、そのようなやさしく純潔な女性よりも残酷で利己的な悪漢 Percy の娘の方が似合うと思ったのか、*Politics in Verdopolis* (Nov. 15, 1833)において、Percy の娘 Maria(のちに Mary) Henrietta(Percy が Lady Zenobia Ellrington と結婚する前の妻との間の娘)を新しい女主人公として登場させ、³⁾ Angria の世界に新しい要素が注入されることになる。Douro侯は Miss Percy に恋したため、夫人の Marian Hume は胸の痛手と病で死に、Douro 侯は Percy の娘 Mary と結婚することになる。Charlotte も Percy という作中人物に関心を高めており、Douro 侯の性格にも自我・皮肉・激情など Byron 的悪魔性を強調しかけていたので、Branwell の方向に同調したわけである。しかし彼女は Marian Hume をそのまま消滅させることを残念がって、その後も“Marian”(July 21, 1837) (51行)などの詩において、Marian を見捨てられ嘆き悲しむ妻として描いている。⁴⁾

また *Corner Dishes* に含まれた詩“Stanzas on the Fate of Henry Percy”

1) *Writings*, Vol. I, SHB, p. 361.

2) p. 19参照。*The Bridal* において Douro 侯と Marian Hume との結婚が描かれている。

3) Percy は Lady Ellrington と結婚するまでに少なくとも2回結婚している。最初の妻は Percy が18才の時結婚した Augusta di Segovia で、2番目の妻が Mary で、Percy が一番愛した女性である。Mary との間に三人子が得られ、長女が母と同名の Mary で、のちに Douro 侯と結婚する。男の子は Edward と William. Percy は二人の男の子は嫌いで追放するが、娘の Mary だけはその母へと同じく深い愛情を注いだ。

4) Marian Hume は、のちに *Villette* の Paulina Mary Home へと展開する。

(June 15, 1834) (282行) では、Alexander Percy の子 Henry¹⁾ が父に追われて南の島を漂う間、彼の妻だった Marian が Douro 侯と結婚するのを嘆き、彼女が若くして死ぬ予告を歌っている。——‘Percy! thy love so strong, so unreturned,/Shall be avenged on earth: her time is brief.’²⁾

1834年後半からは、Charlotte の筆も Branwell の筆もすべて Angria 王国を舞台に進められる。姉弟のどちらが Angria の創設を思いついたのかは分らないが、いつものように、その政治的事件は Branwell によって詳細に記録されている。それは“The Wool Is Rising. Or the Angrian Adventurer. A Narrative of the Proceedings of the Foundation of the Kingdom of Angria . . .”(June 26, 1834)³⁾ においてであり、Ratchford 女史の指摘のように、Angria 物語の成立を語るものとして極めて重要な資料である。⁴⁾

はじめ‘The Country of the Genii’と呼ばれたアフリカ西海岸、Niger河の河口にある Glass Town を中心にした土地は、姉弟の想像力によって種々の変転を見たが、やがて七つの地域——Zamorna, Edwardston, Sydenham, Northangerland, Arundel, Howard, および Warner——をもち、初期の物語に出てきた Wellington, Ross, Parry および Sneachi など七人の王が領有し、Wellington 公がこの Verdopolitan Confederacy の王であった。この王国の首都 Verdopolis の周辺の未開の地を Napoleon が侵略しようとした時、Wellington 公の王子 Zamorna はこれを撃退して国の危機を救った。そこで彼はその報償として自分の領地を得ようと願い、義父の Percy の助力を得て、七人の王の猛烈な反対を押し切り、Verdopolitan Confederacy の東部にある広大で肥沃だが人の居住していない土地の領有を議会で承認さ

1) この Henry は Percy と 2 番目の妻 Mary との間の子のようになっているけれども、極めてあいまいな存在となっている。

2) *Poems*, SHB, p. 169.

3) 30,000語。Ashley Library 所蔵。*Writings*, Vol. I, SHB, pp. 407—434 に Facsimile が収められている。

4) Cf. *The Brontes' Web of Childhood*, p. 77.

せ、そこを *Angria*¹⁾ と命名する。そして *Zamorna* の正式な名称は *Duke of Zamorna, King of Angria, and Emperor Adrian* となり、*Percy* は *Northangerland* 伯としてその首相となる。*Calabar* 河畔に建設された新首都は皇帝 *Adrian* にならって *Adrianopolis* と命名され、七つの領地——*Zamorna, Angria, Arundel, Northangerland, Douro, Calabar* および *Etrei* をもつことになり、種々の障害、反対を押し切って新政府の組織化が急速に進められて行く。

Branwell は *Angria* 王国の創設について、このように政治的事件、地誌などを詳細に記しているが、その他にも“*Coronation of Arthur Augustus Adrian Wellesley, First King of Angria*” (June—Sept., 1834) において、詩と散文で新王国の誕生を祝し、王の戴冠の模様や ‘the seat of Arts and Sciences and Riches and Arms’²⁾ として運命づけられた新首都の華麗さなどをくわしく記している。*Charlotte* も“*A National Ode for the Angrians*” (July 17, 1834) (66行) において創設された王国を讃える詩を書いている。

しかし *Charlotte* は、既に述べたように、*Angria* 王国の外的要素よりも人的要素に関心を集中し、政府の要人や軍人およびその周囲の女性たちのみでなく、作家、画家、歌手などの文化人もも次々と取上げて、次第に華麗な人間模様を描き出して行った。³⁾ 中心人物は *Zamorna* であるが、彼の宿敵として *Percy* も大きな位置を占めることになる。新王国の創設にあたっては *Zamorna* に協力し多大な貢献をした *Percy* であるが、‘a fiery, ardent ambitionist’ であり、‘dark, deep, treacherous, but unconquerable’ と云わ

1) *Angria* はインドの西海岸に城塞をもつ海賊一家の名で、1756年の *Clive* の *Tulaja Angria* 討伐からこの名を思いついたらしい。Cf. *Fannie E. Ratchford: Gondal's Queen* (Univ. of Texas Press, 1955), p. 13, fn.

2) *Writings*, Vol, I, SHB, p. 437.

3) *Charlotte* は *Branwell* と互いに密接な連絡をとりながら物語を展開したようだけれども、*Branwell* が次々と外的事件を記述するのに懸命なのに對し *Charlotte* はそれを補ったり、事件を説明したり、変化を真実らしく合理化したりするのに努めている。従って主要人物を中心とした動きの他に多数の sub-plot が取扱われて人物も多数登場させられ、きわめて複雑になっているけれども、*Angria* 物語は全体としては統一性をもつものになっている。

れるその生来の悪魔的性格が娘婿と平穏な関係が続ける筈はなく、Percy は首相という要職にありながら王への叛逆をくわだてる。激怒した Zamorna は Northangerland 伯と名のるかっての片腕ともいうべき Percy を遂には放逐し、Percy の愛する娘で今は彼の妻となっている Mary との離婚を求めたりするようになる。“Address to the Angrians” (Sept. 15), “Speech of His Grace the Duke of Zamorna, at the Opening of the First Angrian Parliament” (Sept. 20), “My Angria and the Angrians” (Oct. 14)¹⁾ など、Charlotte がこの年の後半に書いたものはいずれも、Zamorna と Percy、それぞれ ‘bright with beauty, dark with crime’²⁾ という Byronic heroic 性格をもつ二人の反目・抗争を取扱ったものである。

“Address to the Angrians” の Facsimile を判読したものをさきに発表し、³⁾ この間の事情について触れておいたので、この点に関して、特に Zamorna と Percy との性格的相剋や互いに他を嫌悪するが無視することもできない両者の対立については、その稿を参照していただきたい。また両者の対立が劇化し、Zamorna が一時 Angria から追われたり王国が戦いで荒廃したり、Zamorna 夫人の Mary が追われて嘆き死ぬことなどの Angria 物語の展開については後に述べたい。

ここではただ、“My Angria and the Angrians” に触れておきたい。ここで Charlotte は Verdopolis から新しい首都 Adrianopolis への人々の移動を描いて、Branwell とは異なり、Angria の住民の生活面に関心を向け、いよいよ彼女独自の物語の展開へ進んで行く。しかしこれは断片的なスケッチのよせ集めにすぎなくて何らまとまったものではない。ただ Zamorna 夫人が夫と父 Northangerland との不和に心乱れる場面は Zamorna と Northangerland との関係の以後の展開の前奏であり、Zamorna が狂気によ

1) 22,000語。Law Collection 所蔵。

2) *Arthuriana* に含まれた詩 (Percy がその2番目の愛妻 Mary の死を嘆く) の一句。 *Writings*, Vol. I, SHB, p. 308.

3) 『甲南女子大学研究紀要』第6号, pp. 71—86.

うに叫びだしたり、別名を使ってひそかな行動をすることなどは、Zamorna の二重性格の展開を暗示している。

またこの作に登場する人物 Patrick Benjamin Wiggins は Patrick Branwell の戯画であり、Charlotte の Branwell 観をうかがわせて興味深い。Wiggins の容姿は次のように描かれている——

. . . there advanced a low slightly built man attired in a black coat and raven grey trousers, his hat placed nearly at the back of his head, revealing a bush of carrot hair so arranged that at the sides it projected almost like two spread hands, a pair of spectacles placed across a prominent Roman nose, black neckerchief adjusted with no great attention to precision, and, to complete the picture, a little black rattan flourished in the hand. His bearing as he walked was tolerably upright and marked with that indescribable swing always assumed by those who pride themselves on being good pedestrians. . . .

ここには当時17才の Branwell の赤毛でとがった鼻、家族の者から将来の大成を期待され自己の才能にうぬぼれた芸術家気どりが滑稽化されている。また彼の誇張癖が皮肉られている個所もあるが、Branwell の三人の姉妹に対する見方がうかがわれる次の対話も興味深い——

‘What are your sisters’ names?’

‘CHARLOTTE Wiggins, JANE Wiggins, and ANNE Wiggins.’

‘Are they as queer as you?’

‘Oh, they are miserable silly creatures not worth talking about.

CHARLOTTE’s eighteen years old, a broad dumpy thing, whose head does not come higher than my elbow. Emily’s sixteen, lean and scant, with a face about the size of a penny, and Anne is nothing, absolutely nothing.’

‘What! Is she an idiot?’

‘Next door to it.’

この時期の Charlotte は実生活の面でも作品の面でも Branwell の影響を最も強く受けていたけれども、¹⁾ 三人の姉妹を見下げ軽蔑している Branwell の思いあがり、Charlotte はむしろ憐れむように笑う余裕もっていたと云えよう。その他この小品の中には、音楽家への言及もあり、当時彼等が音楽の先生に教えを受けていたことなど、姉弟の生活の一面がうかがわれる点も興味深い。

これより先 Charlotte は6月21日より7月21日の間に *The Spell*²⁾ を書いた。これはかなり大部で、ある意味で重要な作であるので、それについては別の個所で取扱うことにしたい。

The Scrap Book.³⁾ 1835年3月17日に書き終えられたこの作は、その副題 'A Mingling of Many Things' が示すように、Angria 王国に登場する雑多な人物と事件を取扱っている。"A Brace of Characters" (Oct. 30, 1834) は Duke of Fidena の息子 John Sneachie と Zamorna の長男 Edward Ernest Gordon⁴⁾ とを取扱い、"Letter to the Right Honourable Arthur, Marquis of Ardrah" (Dec. 6, 1834) は Northangerland と結んで Zamorna 王への叛逆をくわだてる Ardrah 侯の攻撃に対する Zamorna の反ぱくである。また "A Late Occurrence" (Jan., 1835) は Lady Julia Wellesley と Edward G. Sydney との結婚と離婚の事情を取扱い、⁵⁾ 平穩な

1) Ellen Nussey は1832年に Charlotte を当時住んでいた The Rydings (*Jane Eyre* の 'Thornfield Hall' の原型といわれる) に招いた時同行した Branwell について Charlotte ときわめて仲がよかったことを *Reminiscences of Charlotte Brontë* に次のように記している——'... he (i.e. Branwell) was then a very dear brother, as dear to Charlotte as her own soul; they were in perfect accord of taste and feeling, and it was mutual delight to be together.' (*The Life and Letters*, Vol. I, SHB, p. 106).

2) 42,000語。原稿は British Museum の所蔵。1931年 George Edwin MacLean が序文をつけて Oxford University Press より発表。

3) 53,000語。British Museum 所蔵。

4) Helen Victoria との間に生れる。(本稿 p. 11参照)。

5) *The Foundling* についての個所(本稿 pp. 21—22参照)。

家庭生活の継続を描かない Charlotte は、ここでも女性の不幸を追求している。“Duke of Zamorna and Edward Percy” (March 16, 1835) は Zamorna と Percy の長男 Edward Percy との関係を取扱ったものである。

このように Charlotte は何かにとりつかれたように、Angria の世界に夢をさせ続けたが、1835年7月29日 Miss Wooler の学校へ、今度は教師として行くことになり、生徒としての Emily を同行する。Emily はその想像の世界 Gondal¹⁾ との別れを悲しみ、自由の欠如に堪え切れず、3カ月に Haworth に帰り、Anne と交替することになる。これに反し、長女としての責任感を強く感ずる Charlotte は、家を離れる前に Ellen Nussey に送った手紙に、Haworth すなわち Angria の想像の世界との別離に堪えねばならぬ思いを次のように書き送っている――

I am sad, very sad at the thoughts of leaving home but Duty——
Necessity——these are stern mistress who will not be disobeyed.²⁾

そしてそれから1838年5月まで3年近くの間 Miss Wooler のもとで教師生活を送ることになる。その間彼女が Angria の世界から別れていかに苦しいみじめな日々を送ったかは、彼女自身の手記や詩文が痛ましいまでに語っているが、これは Charlotte の “The Young Men’s Play” との訣別、換言すれば責任のない幸福な少女時代との訣別を意味している。彼女はまたこの後も数年 Angria に想像をかけめぐらすことになるが、Roe Head での再度の学校生活は Charlotte の成人としての時代の始まりを印づけ、彼女は実生活面でも精神面でも新たな局面に向けて出発することになる。

1) Emily と Anne とは Angria から離れて独自の世界を創造していたが、1834年11月24日付で、‘The Gondals are discovering the interior of Gaaldine.’ (*The Life and Letters*, Vol. I, SHB, p. 124) と記している。Gaaldine は Gondal legend における南太平洋の大きな島である。

2) *Ibid.*, p. 129.

A Partial List of Charlotte Brontë's Juvenilia (2)

(1832—1835)

CHARLOTTE	BRANWELL
<u>1832</u>	
Aug. 2.	LETTERS FROM AN ENGLISHMAN
Aug. 20. THE BRIDAL	
Nov. 27. "Lines on Bewick" ('The cloud of recent death is past away') (80行)	
<u>1833</u>	
Feb. 8.	THE PIRATE
Feb. 12. "Lament" ('O Hyle! thy waves are like Babylon's streams') (16行)	
March 26. "Death of Lord Rowan" ('Fair forms of glistening marble stand around') (48行)	
April 26.	THE MONTHLY INTELLIGENCER
May 1—31. A NOVEL IN MINIATURE	
June 27. THE FOUNDLING	
Sept. 2. THE GREEN DWARF	
Oct. 2. "The Red Cross Knight" ('To the desert sands of Palestine') (54行)	
Oct. 2. "Memory" ('When the dead in their cold graves are lying') (28行)	
Oct. 7. "Lines Written beside a Fountain" ('Dear is the hour when, freed from toils and care') (28行)	

Nov. 15.

Nov. 20. ARTHURIANA

Dec. 27. "Richard Coeur de Lion and Blondel"
(‘The blush, the light, the gorgeous glow
of eve’) (169行)

1834

Jan. 17. A LEAF FROM AN UNOPENED
VOLUME

Feb. 20—March 20. HIGH LIFE IN
VERDOPOLIS

May 2. "Death of Darius Codomannus" (‘The
muffled clash of arms is past, as if it
ne’er had been’) (239行)

May. 28—June 16. CORNER DISHES

June 15. A DAY ABROAD

June 26.

July 17. "A National Ode for the Angrians" (‘The
sun is on the Calabar, the dawn is
quenched in day’) (66行)

June 21—July 21. THE SPELL: AN
EXTRAVAGANZA

June — Sept.

Sept. 15. ADDRESS TO THE ANGRIANS

September

Sept. — Oct.

Sept. 20. SPEECH OF HIS GRACE THE DUKE
OF ZAMORNA, AT THE OPENING
OF THE FIRST ANGRIAN PARLIA-
MENT

THE POLITICS IN
VERDOPOLIS

THE WOOL IS RISING ;
OR THE ANGRIAN
ADVENTURER

CORONATION OF
ARTHUR AUGUSTUS
ADRIAN WELLESLEY,
FIRST KING OF ANGRIA

NORTHANGERLAND'S
LETTER TO THE
ANGRIANS

THE OPENING OF THE
FIRST ANGRIAN
PARLIAMENT

Oct. 7. "Saul" ("Neath the palms in Elah's valley")
(80行)

Oct. 14. MY ANGRIA AND THE ANGRIONS

Oct. 30. A BRACE OF CHARACTERS
(included in THE SCRAP BOOK)

Dec. 6. LETTER TO THE RIGHT HONOUR-
ABLE ARTHUR, MARQUIS OF
ARDRAH (in THE SCRAP BOOK)

Dec. — Jan.

THE MASSACRE OF
DONGOLA

1835

? A LATE OCCURENCE (In THE SCRAP
BOOK)

March 16. DUKE OF ZAMORNA AND
EDWARD PERCY (in THE SCRAP
BOOK)

June 15 — July 25.

THE HISTORY OF
ANGRIA I